
交点ゼロ未満

ゆりかご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交点ゼロ未満

【Nコード】

N0297B

【作者名】

ゆりかご

【あらすじ】

日系アメリカ人のダニエルとスペイン娘カタリナの日常。二人の生活は少しもどかしくて、とてもやさしい。ほんのり片想い・年の差の、現代ニューヨークを舞台にした掌編連作です。

01：留守番電話

ダンことダニエル・ヒロイの自宅に、ごく最近留守番電話というものがついた。理由は至って簡単で、同居人ができたからである。普通同居人ができたなら留守番電話などむしろいらなはずなのだが、ヒロイ宅の場合は逆だった——何しろ彼女は英語をひとつも解さないのだ。

ニーニヤことカタリナ。英語を話さないスペイン人の、そのくせスペイン語も達者とは言えないバスク語モノリンガルの少女が、ダニエルの同居人なのだった。

英語がわからないから、カタリナが受話器をとることは間違ってもない。それは自発的に電話をかけるという意味でもそうだったし、またかかってきた電話をとる時でも同じだった。

カタリナは今のところ学校には行っていない。もちろん故郷ではちゃんと中学校に通っていたし、勉強は嫌いな方ではなかったけれど、何せ言葉が理解できないのだから意味がない。というわけで半年ばかり就学を延ばすことになったのだった。

それは別にどうということはないのだが、ダニエルのいない日中は暇をもてあます。

どうしようかな、と考えたカタリナの暇のつぶし方が、キッチンにこもることだった。数ヶ月前に死んだばかり——それを思い出すと少し哀しいのだけれど——の母親に教えてもらった料理の腕はなかなかのものだったし、何よりダニエルがそれを食べて少しだけ笑ってくれることが、カタリナにとっては重要なのだ。

その日は自由に使っていていいと言われたキッチンで、ちょうど砕いたアーモンドと粉砂糖を混ぜ、マジパンの生地を練っている最中だった。シンクの片隅に置いてあるコードレスフォンが軽快な音で着信を知らせた。

カタリナはちらりと鳴り響くコードレスフォンに視線をくれたが、通話ボタンを押そうとは思わなかった。どうせ出てみたところで、知らない誰かが知らない言葉で喚き散らすだけなのだし。

いつものようにしばらくコールが続いた後、留守番電話に切りかわった。無機質な女の声が家主の不在を告げる——ヒロイです、ただいま留守にしております。ご用の方は発信音の後に、お名前とご用件をどうぞ。そしてピーツという音がして、普段は電話は切れてしまう。その大抵が、くだらない何かの勧誘だからだ。

だが、今日は違った。コードレスフォンはさらに音を発したのだ。
『ニーニヤ、いるか？』

カタリナは目を見開いて、粉だらけの手であたふたとコードレスフォンを取り上げた。ダニエルだ——彼女をニーニヤなんてふざけた、けれども温かな感情のこめられたスペイン語で呼ぶ人間は、ダニエルしかない。そもそもスペイン語で電話をかけてくる人間も、このアメリカではそうそういないだろうけれど。

あわてて通話ボタンを押そうとしたが、普段使い慣れていないせいかうまくいかなかった。焦れば焦るほど、黒いシンプルなボディが小麦粉と砂糖で真っ白に染まってゆく。まったく後でダニエルに怒鳴られそうな始末だったが、カタリナはかまわなかった。

こちらの悪戦苦闘も知らず、ダニエルの声は続けた。

『どうせその辺りで聞いているんだろ。今日の夕食は外で食うから、六時ごろになったらコート着て待ってる。いいか、六時になったら、コートを着て、待ってる』

それから三度、しつこくダニエルは応えない留守番電話に繰り返した。

カタリナはもはや電話を何とかしようという気をなくしていたが、コードレスフォンを手放してはいなかった。何か大切なもののようにその小さな機械を抱きしめて、じっとダニエルの声を聞いていた。スペイン語はよくわからなかったけれど、アメリカに来てから彼が教えてくれて、日常会話くらいは困らなくなっていた。

留守番電話を再生してみる。六時に、コートを着て、待つてろ。反射的に時計を見上げると、四時だった。作りかけのマジパンをオーブンに入れて、焼いている時間くらいはある。

よし、とひとつうなずいて、コードレスフォンをシンクに置き直そうとした——が、ふと思ひ直して、もう一度留守番電話を再生した。少し乱暴な口調の、男の声——ぶっきらぼうなスペイン語は、それでも聞いているとなんとなくうれしくなれた。

六時になったら、コートを着て、待つてろ。その言葉を、何度も何度も再生させた。

「——俺、コートを着て待つてろって言わなかったか？」

うめいて、カウチで寝こけている少女——カタリナだ、もちろん——を見下ろした。

時刻は六時半を少し回っている。遅くなったと大慌てで購入三年目のセダンを転がし、息せききつて家に飛びこんでみればこのざまだ。カタリナはカウチで眠り、コートも着ていない。部屋は焼き菓子のいい香りでいっぱいだったが、ひよいとキッチンを覗くと粉だらけだった。掃除は誰がするんだ、と泣きたくなってくる。

そして一番やりきれないことと言えば、

「クソ、真っ白じゃないか……」

小麦粉と砂糖にまみれて真っ白になって、どういうわけかカタリナが抱えて眠っているコードレスフォンだった。

まったく何が彼女をそんなに拘泥させるのかと不審に思いながら、ダニエルはそつとそれを拾い上げた。メッセージが入っていたので、何気なく再生ボタンを押してみる。

『ニーニヤ、いるか？ どうせその辺りで聞いているんだろ。今日の夕食は外で食うから、六時』

そこまで聞いた段階で、ダニエルは顔をひきつらせながら消去ボタンを押した。留守番電話に入った自分の声など、恥ずかしいやら気まずいやらで聞きたくもない。

けれどもおかげでカタリナが電話を抱きしめていた理由もわかったような気がする。しつこいくらいにダニエルが繰り返したスペイン語の簡単なセンテンスも、彼女にとっては聞き取りが容易でなかったのだろう。何度再生したのかと、切ないほどに一生懸命なカタリナの様子が頭に浮かぶ。

「——まあ、仕方ないか」

苦笑いとともにため息をついて、上着をカタリナの細い身体にかけてやった。季節はそろそろ初冬を迎えて、夜は冷えこむ。風邪を引いてはかわいそうだ。

そのまま適当な夕食の準備をしようとキッチンに向かいかけたが、ふと思いついて、ポケットから携帯電話を取り出した。コードレスフォンの呼び出しを消音に設定して、コールする。

応えを返した留守番電話に向けて、ダニエルは一言メッセージを吹き込んだ——今度は時間どおりに帰ってくるから。新着メッセージの表示を出したコードレスフォンを、あどけなく眠るカタリナの枕元に置いてやる。

外食の計画はおじちゃんになったが、たまにはこういうのも悪くはないなとダニエルは小さく笑った。

02：オレンジジュース

ベーグル、ピクルス、スクランブルエッグ、そしてオレンジジュース。世間に名だたるニューヨークの朝食と言えば、これが定番である。ダニエルひとりのころはコーヒーだけで済ませることが多かったのだが、カタリナと暮らし出してからは意外にも料理の上手い彼女の世話になっているというのが実情だ。

その日シャワーを浴びて、新聞をポストから取ってダイニングに向かうと、すでにテーブルの上には朝食が並んでいた。カタリナはまだキッチンで何かやっているようだったので手伝おうかと一瞬迷ったものの、以前にも手伝いを申し出てジャガイモの皮むきをしたは良いが、もつと薄くむいてとカタリナに言われたことを思い出したので——つまりダニエルの料理に関する才能は、一般の水準をやや下回っている——、おとなしくイスに腰を下ろして新聞を読むことにする。

一面を読み終え、株価をながめることしばしして、オレンジの香りがふんと部屋に満ちた。カタリナが、昨日買ってきたオレンジを丸ごとしばっているのだ。コーヒー豆ではない香りが家の中にあることに、ダニエルはそろそろ慣れ始めていた。

カタリナが危なっかしい手つきでグラスをふたつ運んでくると、自然とそれが朝食のスタートになる。彼女はグラスをテーブルに置くと、スペイン語でいただきますとつぶやいてベーグルに手を伸ばした。ダニエルなどには信じがたいことなのだが、この少女は朝から食欲旺盛だ。

「毎朝毎朝、お前もよくやるよ。オレンジジュースなんかその辺の店で買ってくればいいのに」

耳慣れない英語のひとりごちに、カタリナは首をかしげて困ったような顔をした。ダニエルは片手をひらひらと振って、別にわからなくてもいいと肩をすくめた。元より返事は期待していない。

カタリナにはどうもよくつかめないところがある。どこで知ったのか、ある日突然ニューヨーク・スタイルの朝食を並べ始めたことしかり、オレンジジュースと言ってオレンジを丸ごとしぼることしかり。

別にスーパーマーケットでボトル入りのオレンジジュースを買ってきたって大して変わらないじゃないか、などとダニエルは思うのだが、カタリナは妙にこだわるのだ。絶対にそんなのはおいしくないと言い張って。

それでもダニエルはこのささやかな変化に眉をひそめるつもりはなかった。不健康だった自分の生活は圧倒的に改善されているし、定時に家に帰ることが多いから時間にゆとりもできた。それに家に人のいるあたたかさというものも、カタリナと暮らすようになって初めて知ることができたのだ。

やっぱり彼女には感謝すべきなのだろうなと思いつながら、ダニエルはグラスの中のオレンジジュースをぐっと飲み干した。少しきつすぎるくらいの酸味が、甘いものの苦手な舌にはちょうど良い。

「そろそろ出かける」

カタリナが背後で、アディオスと笑って言った。

「ハイ、ダン。ブランチにしない？」

声をかけられて振り返ると、同僚のヘルガ・クレメットだった。

金髪色白、ノルウェー移民の彼女は人生のほとんどをアメリカで暮らしているのに、いまだちつともなまりが取れない。その代わりスカンジナビア半島三国の言語をしゃべらせれば、情報部の中でもずば抜けている。

美人に誘われて悪い気はしない。折り良くデスクワークがひと区切りついたこともあり、ダニエルはもちろん、とうなずいた。デスクに『外出中』のメモを残し、立ち上がる。

「めずらしいな、午前中の内に君が自由時間にありつけるなんて」

「最近、半島は平和だもの。フィンランドの失業率なんて、ポーラ

ンドに比べればかわいいもんよ」

「違うないと笑いながら、二人は連れ立って外に出た。今日のニューヨークは一日晴れとニュースが自信たっぷりに告げたとおり、いい天気だった。」

お決まりのベーグルとコーヒーを目当てにして、少し離れたところにあるスターバックスへ足を伸ばすことにした。テイクアウトしてどこかのベンチに陣取ってもいいが、あいにくその暇はない。イト・インにして、ヘルガはシナモン・ベーグルとコーヒーを注文した。ダニエルと言えば、サーモンとハム、それにレタスとトマトをたっぷりはさんだプレーン・ベーグルを頼む。

「ドリンクは？」

「ああ、えーと……オレンジジュース」

カウンターでコーヒーを受け取っていたヘルガは、思わずぶつと吹き出した。

そろそろ二十五歳を迎えようという、それも学生時代はバスケットボールで活躍していた、おまけにどこの国の言語でも彼に話せないものはないと情報部でさえ一目置かれて噂されるような男がオレンジジュースとは、コメディにもほどがある。

「ちよつとダン、どういうジョーク？ ニッポン流なの、それ」

ヘルガが笑い混じりにからかうと、ダニエルは片眉を不機嫌そうに跳ね上げた。基本的には心の広い彼も、レイシャルをネタにしたジョークには少々神経質に反応するくせがある。

「それこそジョークか？ ……毎朝出されるから、どうもこう、くせになったというか」

そこでヘルガはようやくダニエルが引き取ったスペイン娘、つまりカタリナのことを思い出したらしい。もっともらしくふうん、とうなずいた彼女はそれでもいまひとつ納得していないようだったが、ダニエルの知ったことではなかった。オレンジジュースを受け取って、店の外、日当たりのいいテーブルにつく。

コーヒーにミルクを入れてかきまぜながら、ヘルガは思い出した

ようにカタリナの話 시작했다。

「年頃の女の子でしょ。やっぱりちょっとまずいんじゃないの、そういうのって」

ああまたか、と内心ダニエルは頭をかかえなくなった。『年頃の女の子』だとか『男と一緒にはずい』だとか、そんなことはカタリナを引きとると決めた時からこっち、耳が痛くなるほどあちこちから言われていることだった。もちろんヘルガはいわゆる世間体のことを言っているのだろうが、ダニエルにしてみればそんなに人を口リコンにしたいかとわめきたい気分だった。

小さくため息をついて、オレンジジュースの紙コップを手に取った。こういう話には適当にうなずいておくのが良いと知っている。下手をすると市の福祉課に目をつけられるとかどうか、ヘルガがぶつぶつこぼしているのを右から左へと素通りさせながら、もはやすっかり慣れ親しんだオレンジジュースを一口。

「……なんだ、これ」

すさまじく顔をしかめて、ダニエルは紙コップから口を離れた。どうしたの、とヘルガは話をストップして紙コップを覗き込む。

「なんか——まずい。おかしくないか、これ」

飲んでみてくれとヘルガに紙コップを手渡して、ダニエルはいらいらと立ち上がりかけた。店長にどうしたことだと文句を言って、せめて代金——どうせードルもしないのだが——くらいは返してもらわなければ。

「別に変じゃないわよ。普通のオレンジジュースでしょ」

ところがダニエルの背中に、ヘルガはそんなことを言った。どう鼻屑目に見たところで、こんな水っぽいオレンジジュースをオレンジジュースと呼ぶわけにいかないのにだ。

「普通なわけじゃないか。メチャメチャに甘いし、水っぽいよ」
「普通よ。私も時々朝に飲むけど、こんなもんよ」

それでもそんなに気になるならと、ヘルガはアルバイトではなくて正社員の方の店員を呼んでくれた。そこでダニエルは早速口を開

きかけたが、ヘルガはそれを制し、このオレンジジュースはどういうものなのかとまずは穏便に問いかけた。

「はあ、カリフォルニアから工場に直送したオレンジを、濃縮還元した百パーセントジュースですが」

何か問題でも、と困惑する店員ににっこり笑ってありがとう、と言うと、ほらねとヘルガが当たり前とでも言いたげな目配せをよこすものだから、ダニエルはもう何も言えなくなってしまった。しぶしぶながらうなずいて、オレンジジュースをぐいっと飲み干す。

「……どうも、カタリナに毒されてるな」

紙コップを握りつぶしながらぼやくと、ヘルガが明るい笑い声を上げた。

03：過剰サービス

ダニエルが海外出張に出かけるなどというのはめずらしい話でもなんでもないのだが、いかんせん以前その役割が回って来た時とは根本的に状況が異なってしまうている。つまりカタリナの存在だ。

一人暮らしの女性、それもダニエルがそれなりに親しく付き合っているヘルガにお鉢が回ってきたのは、ある意味当然の結果と言えた。「一週間でいい、家に置いてやってくれないか」

両手を合わせて懇願されて、なお承知しないほどにヘルガは冷酷ではない。こういう状況考えてなかったの、と少々手厳しい嫌味を放ちながらも、その夜ダニエルとともにやってきたカタリナを出迎えた。

カタリナは少し緊張したおももちで、何回も練習したのだろう、なんとかつかえずに、それでもぎこちのない英語であいさつをした。

「こんにちは、ミス・クレメット。私はカタリナ・ファーストと言います。よろしく願います」

そのきちようめんな様子には逆にクレアの方が慌ててしまって、わずかばかり習い覚えていたスペイン語であなたに会えてうれしいわ、とカタリナの英語よりもひどい有様ながらなんとか伝えた。それでもカタリナは、それを聞いてちょっとだけ笑ってくれたけれども。

「ねえダン、私のことはヘルガって呼ぶように言ってくれる？ 仕事以外でクレメットなんて他人行儀だし、しばらく一緒に生活するんだし」

「俺のことまだダニエルなんて呼んでるんだぞ、期待しない方がいいと思うぞ」

肩をすくめながらもダニエルはヘルガの要望をスペイン語に翻訳し、カタリナに伝えた。彼女は理解できたのかできていないのか、

首をかしげて養父の言葉を耳をすませていた。

その様子はまるで小鳥のようで、ヘルガはなんとはなしにカタリナを好ましく思い始めていた。何より、真剣にこちらの言うことを聞いてくれるその熱心な姿勢が良い。例え他愛のない独り言であっても話す価値があると思わせるまっすぐな目は、大人になってしまった自分には到底持ち得ないものだ。だからダニエルもカタリナを傍に置いているのかもしれないと思う。

「じゃあな、ニーニヤ——カタリナ。あんまりヘルガにわがまま言うなよ」

物思いから我に返ると、アディオスと片手を上げてダニエルはセダンに乗り込むところだった。カタリナが一生懸命に手を振っているのが、なんだかいじらしかった。

以前のダニエルと同じく、というよりも大抵の情報部員と同じく、ヘルガの日常もかなり不規則で不健康的なものである。夜は深夜を過ぎるまで帰宅できないことの方が多いし、明け方にもつれこむこともしばしば。健康と美容を考えると恐ろしいのだが、食事のバランスも取れているとはいいがたい。

それでもここ数日はカタリナがいるからと努めて早く帰宅するようになったのだが、その日はたまたまスカンジナビア半島でちょっとした事件があつて、ヘルガは一日中借り出され、あちこちを走り回っていた。結局シボレーを車庫に入れた時には夜中の二時過ぎ、疲れきってメイク落としもままならないような状態だった。家の中はしんとして、当然カタリナは寝ているらしい。ずるずると引きずるような足取りでなんとかベッドにもぐりこむのが関の山で、そうした瞬間、ヘルガはもう意識を失っていた。

「——て、朝。ヘルガ」

たどたどしい英語とともに、肩を揺すられている。

うん、とうつとおしげな呻きをこぼして、ヘルガは大きく寝返り

を打った。うるさい、昨日は遅かったんだからもうちょっと寝かせてよ——ねばけた脳味噌でそんなことを考える。

それでも無意識とは恐ろしいもので、手は勝手にベッドサイドに置いてあるはずの目覚まし時計をたぐり寄せていた。精神力だけでなくなんとか目を開くと、肩に置かれた細い腕が目に入って途端に目が覚めた。——カタリナだ。

「七時半。ダニエル、いつも起きる時間」

なるほど確かに時計は七時半をしめしていた。出勤まではあと一時間ほど。

慌ててベッドから跳ね起きて、

「ごめんね、ちょっと待ってて何か作るから——ああでもその前にシャワー浴びさせてっ！」

ばたばたとバスルームに走る。

超特急でシャワーを浴びて、クレンジングで昨日のメイクを落として新しくまたメイクを済ませると、ヘルガはキッチンに突撃した。おととい買ったミルクと食パンと、どこかにあったような気がするベーコンと、この際適当でもかまわないから何か作ってカタリナに食べさせてやらないと。

ところが冷蔵庫を覗いていると、カタリナが後ろからくいくいとヘルガの袖を引いた。

「作った」

気恥ずかしそうにそれだけぱつりとつぶやいて、カタリナはうつむいた。黒い髪からちらりとのぞく耳たぶが赤く染まっている。一瞬言葉の意味をつかみ損ねたヘルガは、けれどもそのカタリナの様子でぴんと来た。

「作った、って……あなたが？ ええと、」

少し考えて、スペイン語で言い直した。

「あなたが、作ったの？」

するとカタリナはこくんとうなずいて、ヘルガにこっち、とうながした。誘われてダイニングに足を踏み入れると、テーブルの上に

は見事としか言い様がない二人分の朝食が鎮座していた。湯気を立てるコーヒー、その隣のオレンジジュース、かりかりのベーコンにメープルシロップ、それにそえられたトマトとレタス、そしてキツネ色のトースト。まるでかいがいしくてかわいらしい新妻がいるみたいじゃない、と思わず目を見開く。

——いや、そうではない。うつかりと妙な現実逃避をしかけた頭をこちらに引き戻し、ヘルガはカタリナを振り返った。彼女はもじもじとその場に立ち尽くし、この趣向は気に入ってもらえただろうかとこちらをそつとうかがっていた。

文句などあるはずもない。ダニエルなどが見れば思わず赤面しそうなほどの完璧な、満面の笑みを浮かべて、ヘルガはやさしくカタリナの手を取った。

「グラシヤス、ありがとう」

その瞬間、ぱつと顔を上げたカタリナの頬は赤く染まっていた。口の中でもごもごとつぶやいたのはどういたしましてとかそんな言葉だろうか。子どもめいてしつとりと汗ばんだ手のひらさえ、緊張していたのかと思うと微笑ましかった。

何にせよ、料理は冷めない内が一番だ。二人は優雅な朝のひとときを、トーストにバターを塗ることから始めた。

一週間後の夜中近く、目の下にクマを作ってほとんどよろめきながら帰ってきたダニエルに、カタリナの三食上げ膳据え膳プラスモーションコールサービスを受け続けたヘルガは言ったものである。「意識してないんだとしたら言うておくけど」

ダニエルを待った挙げ句にカウチで寝こんでしまったけなげな少女を、ちらりと見やる。

「ずいぶんいいご身分ね、ダン」

「なんだよそれ、わけのわからないこと言わないでくれ、疲れてるんだよ」

「サービスがよすぎてことよ。……あなたにはもったいない子じ

やない？」

こんな薄情な青年のところに住まわせておくよりは自分が手元で
いつくしんでやりたいと思う心の裏側にカタリナの献身をうらやむ
本音がないとは言い切れなかったが、それでもヘルガは明日から逆
戻りする予定の不健康な生活に鼻を鳴らして不満を表明した。多忙
な自分たちにはあのくらいの過剰サービスでちょうどいいのに、と
思いながら。

04：似非

十二月に入ると、ニューヨークはとたんにクリスマスへと模様替えをする。どこを歩いていてもストリートはイルミネーションで飾りつけられ、メイシーズのショーウィンドウは映画『34丁目の奇跡』とそっくり同じデコレーションを作りあげた。ロックフェラーセンターの広場ではさっそくスケート場がオープンし、ホリデー・バーゲンも始まって、プレゼントを買いに走る親子の姿も多い。

要するにお祭り騒ぎだ。クールを気取るニューヨーク人も、こうなると典型的なアメリカ人にすぎない。

そしてダニエルもまた、しょせんニューヨークでアメリカ人だった。父にはあのプレゼントをとか、カタリナにはこれがいいだろうとかとか、ヘルガにはへたなものを贈れないとか、ライトアップされた街並みを見るたびに、ついぼんやりしてしまう。

そうしてうずうずを繰り返した一週間の後、土曜日の朝、とうとうダニエルは宣言した。

「今日は買い物に行くぞ。クリスマスの買い物だ」

クリスマスとは、よほど魔力を持っているらしい。

その言葉を聞くと、朝食のしたくをしていたはずのカタリナは目を輝かせて飛び上がった。普段はあまり大騒ぎすることなどないのに、きやあきやあとはしゃぎまわって、幸いにもキャップは閉まっていたがミルクのボトルをひっくり返したくらいだった。

そんな少女をなんとかだめ、相も変わらず豪勢な朝食をありがたくいただいた午前十時過ぎ、ふと思いついてダニエルはこんなことを口にした。

「ヘルガも誘ってみるか、お前好きだろ、彼女。どうせヒマだろうし」

案の定、携帯電話を二度もコールしないうちにヘルガは電話に出て、ショッピングを条件つきでOKした。すなわち、ランチはダン

がおこつてね。商談はダニエルの運転するセダンでヘルガをひろい、そのままメイシーズに向かうという具合にまとまった。

カタリナはよろこびすぎて、今度はグラスをひとつ落として割った。

ダニエルの実母というのが、日本人ゆえだろうか、どうにもブランド物に弱い。ことに、店の名前というものに弱かった。

クリスマス・ショッピングの行き先にダニエルがメイシーズを選んだ理由といえば、それだった。あの店はいいのよと十歳まで吹きこまれて育った結果、さすがに日常の買い物までを頼ろうとは思わないが、こうしたイベントの買い物には決まってメイシーズに行かなければならないような気分になってくる。

ヘルガはダニエルを茶化してあなたがブランド物にこだわるとは知らなかったわ、と笑ったが、こればかりは彼に文句が言えようはずもない。苦虫をかみつぶしたような顔で運転を続けた。

それでも実際に店に入れば、盛り上がるのはいつでも女の方だ。

手始めにチョコレート、次はバッグ、クツだ服だ化粧品だと連れ回され、カタリナがどかりとイスに腰をおろしたサンタクロースをながめるころになると、ダニエルはすっかり疲れきっていた。

「子どもは元気だな」

コーヒーを飲みながら憎まれ口を叩いたが、あいにくと女の方が一枚上手だった。狐のように目を細めたヘルガが皮肉げにきれいに紅を引いた唇をゆがめ、ふ、と鼻を鳴らすのにダニエルはたじたとした。

「ダンの体力がないんですよ。……ほら、行つてきなさいなカタリナ」

サンタクロースにむらがる子どもの輪の外、ぽつんと彼らを見つめるカタリナの背中を、ヘルガはやさしく押してやった。だがカタリナは首を横にふる。

ヘルガは首をかしげたが、ダニエルにはぴんときた。スペインに

はサンタクロースという概念がなく、だからカタリナにはあの赤い服を着て白い長いひげを持ったやさしげな老人が、とても不思議に思えたのだろう。

小さく笑って、ダニエルは彼女に、サンタクロースのスペインで果たす役割を教えてやった。するとやつと合点がいった彼女はぱつと頬を赤くして、子どもの輪の中にものすごい勢いで突っ込んで行った。呆氣に取られてヘルガが目をはたばたとさせる。

「……なんて言ったの？」

「三人の王様。スペインのサンタクロースみたいなもの」

ふうんとうなずいたヘルガの視線の先では、すばやくサンタクロースの下にたどりついたカタリナが、こちらを指さして何事かサンタクロースに話しかけている。まさかスペイン語の話せるサンタクロースというわけでもなからうが、ふむふむとうなずく老人を見るにつけ、カタリナの言うことを理解しているように思えてくるから不思議なものだ。

「ダニエル、ヘルガ！」

そのうちに大声でカタリナに呼ばれ、顔を見合わせて苦笑しながら、ダニエルとヘルガはサンタクロースに近づいた。なんだか妙な気分だった。

周りにいるのは子どもばかり、そしてその外側にいるのは彼らの親。自分たち三人は家族でもないのに、家族たちにまぎれてここにいる。即興で寸劇をやらされているような、ぎこちのない雰囲気だった。

それでもどうしたとカタリナに問うてみると、バスク語半分、スペイン語半分でジェスチャーをまじえながら、早口でまるでマシンガンのようにしゃべりだした。立て板に水、止める術もなく、ダニエルは目を白黒させながら、どうにか聞きとれるスペイン語だけを耳で追いかけた。彼女には悪いが、バスク語などという悪魔も裸足で逃げ出すような、僻地の言語までは身に付けていないのだ。

それでもプレゼント、王様、手紙、母さんと父さん、ヘルガ、そ

うしてダニエルといういくつかの単語だけは確かに聞き取れて、要するにクリスマスプレゼントのおねだりなのだろうこれは、とダニエルは苦笑いを噛み殺した。普段はしれっとした顔で淡々と家事をこなすカタリナも、こんなところはまだ少女めいてかわいらしい。

「王様はちゃんと来るよ、お前のところにも」

ヘルガも同調して、そうよと力強くうなずいた。あなたはいい子だから、絶対サンタクロースも来るわよ。カタリナの元に来るのは――もしそんなものがあればの話だが――サンタクロースではなくて三人の王様なのだが、この際それはどうでもいい。

二人の微笑みにようやく安心したのか、カタリナはほっとしたように肩から力を抜いた。そしてポケットに手を入れて封筒をひとつ取り出すと、それをサンタクロースに押しつけた。

「王様に、わたしでもらう」

「――と言ってる。受け取ってくださいませんか」

そのまま訳してダニエルがサンタクロースに頼むと、老人はもちろんとにこやかに笑い、カタリナの頭をぼんぼんとなでた。手紙を受け取って、ひざの上に置く。

それで満足しきったカタリナは、にこりとサンタクロースに笑いかけて手をふった。

「ムチャス・グラシヤス、セニョール」

バイバイと無邪気に笑い、カタリナはダニエルの手を引いた。もういいよ、ありがとう。そんな意図が、ぎゅっとにぎられた手にはこめられていたような気がする。

ヘルガはと言えば、後ろでサンタクロースにつかまって、耳元に何がしかささやかれていた。彼女が目丸くしたところを見ると、どうやら予想もつかないようなことだったらしい。

後で何を吹きこまれたのかぜひ聞かせてもらおう、それにしてもこの養子は十四歳とかいう触れ込みだがちよつと子どもっぽすぎるんじゃないのか、などと思いながら、ダニエルはカタリナに引きずられ、子どもたちの輪の外に連れ出されていた。

「かわいい娘さんですね、って」

シーザーサラダのチキンをフォークでつつきながら、誰に言うでもなしにヘルガがつぶやく。チキンの上を行きつ戻りつしていたフォークは、結局レタスをつきさした。ダニエルがトマト味のペンネを口に運びながら、かすかに肩をすくめて意味がわからないとジェスチャーしてみせると、彼女は皮肉そうに頬を引きつらせた。

「カタリナのこと。若夫婦と養子だとも思っただんじやないの？」
「……へえ、それはそれは？」

どう切り返せばいいものか一瞬わからずに、ダニエルは眉を寄せた。ヘルガの隣でグラタンの攻略にかまけつきりになっているカタリナを見やる。次いで同僚たる女性——ヘルガを。

娘と母親、向かいの自分はさしずめ父親か。言われてみれば見えないこともないのかもしれない。ただ、親になるにしては、両親ともに若すぎるが。

「クリスマスの間くらいは、それでもいいかもな」

言い返すというほどにでもなくぼんやりとひとりごちながら、ダニエルは窓の外に視線を移した。赤と緑、そのほか様々な色のイルミネーションにいろどられた、映画のような奇跡のような光景は、ひとりきりでいるには少しばかり明るすぎるように思えた。

「そう思わないか、ママ？」

「思わなくもないわね、ダディ」

にやりと笑った大人たちを、カタリナが不思議そうにながめて首をかしげた。

05：オークション

ディナーの食器を片付けるのはダニエルの役目になっている。それはたとえ来客があつたとしても、あるいはそのディナーがクリスマスのものであつても同じことだ。

クリスマス・デイには三日ほど早い、当日には用事があるというヘルガのために、彼女を招待してのクリスマス・パーティが今日はヒロイ宅で開かれていた。

ホストの片割れであるダニエルに片付けを任せて、女二人はリビングでテレビを見ている。時々かしましくも楽しげな声がキッチンまで届き、年の離れた彼女らが意気投合しているらしい様子にふ、とダニエルは笑った。

「で、何見てるんだって？」

まくり上げた袖を下ろしながらリビングに顔を出すと、パンプスを脱いでカウチでクッションを抱えたヘルガが首をこちらにめぐらせた。今日の彼女はとう見ても普段着には見えないドレスシャツに長い足をことさら強調するような細身の黒いパンツ姿で、ボブカットの金髪もかすかなフローラルの香りがするスプレーでこぎれいにまとめていたが、そのやや子どもじみたしぐさは自宅でくつろいでいる時と変わらないように思えた。

「ベートーベン直筆の楽譜であつたでしょ、サザビーズでオークションされたつていう」

「今月の頭だっけか？ ロンドンだったよな、確か」

結構な話題になって、新聞にも載っていたニュースだった。たまダニエルは出張でイギリスに行っていて、そのたいそうな騒ぎをタイムズで読んだのだが、まあ黄ばんだ紙きれ数枚によくもあんなに金を出すもんだ、と半ば呆れた記憶がある。

「すごいわね、一八〇万ポンドなんてちょっと想像もつかないわよ」
あるところにはお金つてのはあるのねえ、と物憂げにため息をつ

いて、ヘルガは再び視線をテレビに戻した。

「ヨーロッパは金持ちが多いって言うじゃないか。あ、カタリナ、片付け終わったぞ」

言葉はわからないなりに画面に見入っていたカタリナは、声をかけられてぱっと立ち上がった。コーヒーを煎れにいそいそとキッチンに向かう後ろ姿は、心なしか浮かれているようだった——クリスマスプレゼントをもらった直後では、それも当たり前のことだろう。彼女と入れ違いにカウチにすべりこんだダニエルは、かたわらに転がっていたテレビガイドを手にとってめくった。もっと興味を引くプログラムを探したが、あいにくと季節柄、めばしいチャンネルではあまりいいものを放送していない。テレビ局の職員もクリスマス休暇中というわけだ。

「ケーキはどうしたの。どこかで買ってるふうでもなかったけど」
ただよい始めたコーヒーの香りに鼻をひくつかせながら、ヘルガは目に見えてそわそわしていた。彼女は甘党で、ことにケーキやパイの味にはうるさい。そもそも日ごろはその腕前を披露することもないが、料理は得意な方だと聞いている。

ガイドに頼るのはやめにしてチャンネルをがちゃがちゃと切りかえながら、ダニエルは頭の中に、数分後にテーブルに出てくるはずのケーキを思い浮かべた。チョコレートでかわいらしくコーティングされ、ごていねいにパウダーシュガーとアラザンで雪まで表現された、手間のかかりそうなブッシュ・ド・ノエル。

「カタリナが作った。インターネットのレシピをわざわざスペイン語に翻訳するはめになったよ」

おまけに昨日は、家中にあまつたるい香りがただよっていた。男の嗅覚には、あれはいささか辛いものがあつたとダニエルは苦々しく頭を振る。

だがげんなりした顔でそう言うと、ヘルガは心外だというふうに鼻を鳴らした。あいかわらずいいサービスじゃないのと皮肉る口調には、うらやましいという妬みも多少はまじっているようだった。

「ベートーベンの楽譜じゃないけど、一八〇万ポンドでも私が競り落としたくらいよ」

へえ、と片眉を跳ね上げたダニエルの顔に含み笑いを見つけたらしいヘルガは、冗談で言ってるんじゃないわよ、と半ば目を細めて言ったものだ。どうやら本気でカタリナの保護者に立候補したいらしい。

その時ひよいとカタリナがキッチンから顔を出し、二人のかけ合いなどまるで気にも留めずにダニエル、と養父を呼んだ。トレイに載せた三つのカップを示して、言う。

「はこんで。私、ケーキ食べてくる」

「haveじゃない、そういう時はtakeだ」

苦笑しながらあどけない英語の間違いを直してやり、ちょっとカタリナの頭をなでてから、ダニエルは彼女の手からトレイを取り上げた。ケーキのお出ましたとあごをしゃくって、ヘルガにテーブルにつくよううながす。Yes, sirと少々おどけた様子で言いながらテレビを消して、彼女は立ち上がった。

肝心のケーキと言えば、カタリナが腕によりをかけたブッシュ・ド・ノエルは口ウソクを立て火を点けると、電気を消した部屋の中でずいぶんと幻想的に見えた。ヘルガにできればえをほめられて、カタリナはほとんど有頂天になっていた。そうして三人は、カタリナはバスク語で、ヘルガはフィンランド語で、そしてダニエルは英語で『もろびとこぞりて』を歌ってから、そのブッシュ・ド・ノエルを美味しくいただいた——それはまさしくクリスマスだった。

帰り際、楽しかったわありがとう、と言ってシボレーに乗りこむヘルガが、ふと思いついたように問うた。

「さっきのオークションだけど、ダンならいくら出すの？」

まだあんなジョークをおぼえていたのかと、ダニエルは驚きに小さく目を見開いて、それからしれっとした顔で言った。

「It's priceless for me, isn't it？」

そのitの示すものがヘルガにはきちんとわかったのだろう、彼女はごちそうさま、と苦笑いの形に唇をゆがめ、エンジンをかけたぶるりと身震いした赤い車から一歩ダニエルは離れ、じゃあまた、と手を上げる。

そう言えばハッピー・クリスマスを言い損ねたとダニエルが気づいたのは、シボレーが見えなくなってからのことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0297b/>

交点ゼロ未満

2010年10月12日04時05分発行